

当院透析患者における下肢切断と生命予後に関する因子の解析

長崎腎病院

○外山麻衣、熊垂須沙、青柳真生、山中真樹子、丸山祐子、一ノ瀬浩、佐々木修、澤瀬健次、橋口純一郎、原田孝司、船越哲

【目的】

当院維持透析患者で下肢切断術に至る過程と切断後の生命予後について背景因子から検討した。

【対象・方法】

1996年～2016年までに当院で透析中に下肢切断術を受けた51名（男性37名、女性14名）を対象とし透析導入から下肢切断までの経過と切断後の生命予後について糖尿病（DM）の有無・透析歴等の因子にて検討した。

【結果】

原疾患ではDM：非DM＝36：17とDMが多く透析導入から切断までの期間はDMで10年以内が86%と最も多く非DMでは20年以上で40%と最も多かった。一方切断後の生存期間は2年未満・2-5年未満がそれぞれDMで30%・17%、非DMで86%・0%であった。

【考察】

DM患者は導入後早期に下肢切断を経験し切断後の生存率は緩やかに低下した。非DM透析患者は透析歴20年以上での下肢切断が多く切断後は5年以内に全員が死亡した。DMの有無は下肢切断に関する因子となるが切断後の予後に関しては長期透析による動脈硬化等の関与が推測された。